［原著論文］

働く精神障害者のジェネラティヴィティとエージェンシー
－ 4 人のライフヒストリー －

村上満子

抄　録

背景：障害者権利条約締結は精神障害者の雇用と自立に追い風となる。働いて自立するという精神障害者の挑戦への支援が求められている。
目的：研究協力者のライフヒストリーをもとに発達課題の特徴を明らかにし、支援の在り方を提示する。加えて、方法論的な課題を見出す。
方法：関東の 2 法人で就労支援を利用する精神障害者 4 名を対象に半構造化面接を行った。インタビューデータを人の生き方の基本的な様相であるジェネラティヴィティ（他人への関心）とエージェンシー（行為遂行者のポテンシャル）の対テーマに、演繹的にコーディングする内容分析をした。
結果：エージェンシーの表現が最も多く、ジェネラティヴィティの 3 カテゴリーのうち「他人への配慮」の表現は各研究協力者で 1 箇所であった。
結論：働く精神障害者の発達課題の特徴は①「他人への配慮」は同じ苦しみを抱えた仲間への配慮として表現されていた。一方、②エージェンシーは発症後に多く出現し、社会復帰や仲間に関する表現が目立った。このような特徴から、次の 3 点を支援の在り方として提示する。①精神障害者を常に自分の可能性を追求する存在と見なすこと、②社会復帰を目指し、他人との関係性のなかで「できる」という実感や、③仲間との信頼関係が築けるような関わりを増やすことである。方法論的には、カテゴリーの精錬と語彙集作成が課題として明らかとなった。

キーワード：働くこと　精神障害者　ジェネラティヴィティ　エージェンシー　ライフヒストリー

Ⅰ．背景

障害者権利条約締結を受けて、平成 28 年 4 月に改正障害者雇用促進法が施行され、障害者に対する差別の禁止及び合理的配慮の提供義務、法定雇用率の引き上げ及び算定基礎に精神障害者を加える雇用義務化がはじまる。障害のある人も職業をもって自立できる、当たり前の社会を実現させることが目指されている。

平成 28 年の障害者雇用状況集計結果（厚生労働省）では、民間企業に雇用されている精神障害者は 42,028 人（対前年比 21.3％増）と実数ではわずか 8.86% だが、伸び率は最も大きく可能性を秘めている。今後、企業に雇用義務を課すにあたり、精神障害者の地域生活への理解、医療機関と地域支援者との連携が鍵となる（独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構障害者職業総合センター , 2012）。

精神障害者にとって働くということは、病気や障害を引き受けて社会復帰することである。働き続けるということは、病気や障害のないときよりも自らに向き合い、心身の状態をコントロールして一日一日を積み重ねていくこと（星野 , 1998; 野口 , 2013; 大橋 , 2006）である。つまり、精神障害者が働くということは、病気や障害のないときの発達課題に加えて病気と折り合うことへの挑戦でもある。

このような当事者の人生を理解するために、これまで、当事者の語りであるライフヒストリーの分析が行われてきた。分析には 2 つの立場があった。一つは、病いの経験を社会的プロセスとして理解する（Kleinman, 1988）方法であり、もう一つは、その人の病いの意味を現象学的存在論の立場から解釈する（Benner & Wrube, 1989）方法である。

前者の立場で北村（2004）は、病いの意味を創り出す過程が病いを得る前の、その人の生き方に影響を受けると指摘した。後者では田中（2000a, 2000b）が、看護における他者経験の一つの可能性として当事者にとっての病いの意味を明らかにした。ともに、ライフヒストリーの質的分析によって看護の対象理解に寄与した。

本論文では、これらの事例研究から得られた知見を、様々な状況にある精神障害者への支援に結実させること

沖縄県立看護大学

を長期的展望としつつ、次の方法で発展させる。すなわち、人の生き方の基本的な様相をテーマとするライフヒストリーの内容分析から 3 つの成果を目指す。第一に、人の生き方の基本的な様相からみた働く精神障害者の発達課題の特徴を明らかにすることである。第二に、支援の在り方を提言することである。第三に、方法論的な課題を明らかにすることである。これらが本論文の目的である。

Ⅱ．概念枠組み

人の生き方の基本的な様相として他人への関心（ジェネラティヴィティ：“Generativity”）と行為遂行者のポテンシャル（エージェンシー：“Agency”）という対となる概念を想定した。この二つの概念は、アメリカの哲学者 Bakan（1966）の“Comunion”と“Agency”をもとに、“Comunion”を Erikson の“Generativity”（以下、ジェネラティヴィティ）、“Agency”を McAdams（2001）の内容カテゴリーを行為遂行者のポテンシャルとして捉えなおし、想定したものである。

ジェネラティヴィティは、Erikson（1959）の造語である。Erikson のパーソナリティ発達理論には内容の豊かな体系化された発達段階がある（Stewart et al, 1988）。ジェネラティヴィティは主として次の世代を確立し、導くことへの関心である。「次世代」ということを自分の子どもへの関心だけではなく、利他的な関心や創造性への関心と解することができる。重要なのはジェネラティヴィティが健康的なパーソナリティの一段階であるということ、この段階の豊かさを獲得できない場合に人は退行して偽りの親密さを求め、対人関係における窮乏化が伴うということである。

本論文では、この言葉のもつ広がりを残すために、Erikson の『アイデンティティとライフサイクル』の訳者である西平直と中島由恵の用語解説に準拠して、ジェネラティヴィティとカタカナ表記にした。

Stewart ら（1988）はジェネラティヴィティを 4 つの内容カテゴリー（“Caring”“Productivity”“Need to be needed”“General concern”）として体系づけている。本論文では、そのうちの 2 つについて次のように捉えなおした。一つは“Productivity”というカテゴリーに関連する「次世代」を未来への希望や意欲と捉えなおし、Intentional action（意志行為）とした。もう一つは「次世代に対する継続的貢献への関心」である General concern を広く解して“Caring”（他人への配慮）に含めた。“Intentional action”を「未来への意欲」と捉える理由は行為の表現は何らかの未来の記述であり（Anscombe, 1963）、行為の原因（目的、願望）は行為遂行者自身のうちにあるというアリストテレスの分析（黒田 , 1992）に基づいている。したがって、本論文ではジェネラティヴィティを Stewart ら（1988）のコーディング体系を 3 つのカテゴリー体系に捉えなおして用いる。

英語の agency という単語には代理店、取り次ぎ、仲介者、[政府の] 機関などの意味があるが、哲学・社会学では行為者性や行為主体性という意味がある。Bakan（1966）は、人の生き方の基本的な二つの様相として、“Agency”と“Comunion”をあげている。この考え方はパーソナリティ心理学者の McAdams により、アメリカ人のパーソナリティ研究の基礎的な概念となっている。本論文では、McAdams（1988）の“Agency”を参考にしつつ、ジェネラティヴィティとの相対的視点として“Agency”を行為遂行者のポテンシャル、活力、潜在力、溜めとして用いる。このような“Agency”の概念は古代ギリシャの『徳』や『幸福』（菅 , 2016）、プラトンの『徳』概念（Plato, 1578）にもつながる。したがって、本論文では訳語を与えずにエージェンシーとカタカナ表記にした。なお、ジェネラティヴィティとエージェンシーという対概念の活用は Maruna（2001）の方法論に依拠している。

これら 4 つの概念およびカテゴリーを行為遂行者である「私」と他人、「私」と未来についてのイメージ図として描き出す（図 1）。

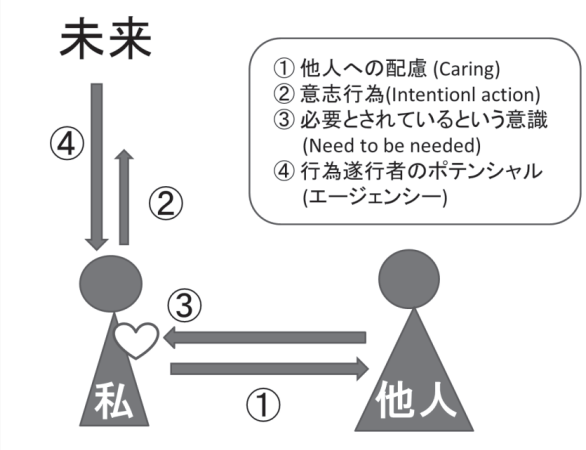

図 1　行為遂行者「私」と他人および未来についてのイメージ

イメージには 3 つのポイントがある。第一に、他人との関係において①「他人への配慮：“Caring”」と③「必要とされているという意識 : “Need to be needed”」のベクトルは対立関係にある。第二に、未来との関係において「未来への意欲」は人間としての能動性の源であり②「意志行為 : “Intentional action”」で表わされる。これは、能動性の結果として受け取る④「行為遂行者のポテンシャル : エージェンシー」と逆方向のベクトルをもっている。第三に、③「必要とされているという意識」は他人からの求めを受ける構えのある状態であり感情で表わされる。

以上の概念枠組みをライフヒストリーという場に設定する。本論文では、ライフヒストリーを聞き手と語り手の相互行為に支えられた個人のライフについての口述の物語（桜井 , 2014）として捉える。ライフヒストリー法には解釈の客観性における課題（江頭 , 2009）のあるこ

とから、これを克服する方略の一つとしてカテゴリーへの演繹的コーディングである内容分析を用いる。

Ⅲ．研究方法

1．研究協力者と選定方法

研究協力者は関東 2 県の 2 法人（J, K）での就労支援を利用している精神障害者 4 名である。選定方法は J 法人では運営委員会にて研究計画を説明し、6 カ所の就労支援事業所施設長に研究協力が可能な利用者で、できるだけ異なるタイプの利用者 3 名の選定を依頼した（J 法人の就労支援利用者は就労移行と就労継続 A 型・B 型を合わせて約 160 名）。調査期間までに 2 名の利用者の同意が得られた。K 法人では、研究者が L 法人から紹介された研究協力者の 1 人が K 法人の地域活動支援センターを利用しており、その方に研究目的を説明し調査協力の同意が得られた。この研究協力者から K 法人で働く別の研究協力者の紹介を受け、その方の同意が得られたので研究協力者とした。

2．データ収集方法

調査期間は平成 25 年 10 月から 12 月であった。研究協力者には事前に調査説明書、同意書、インタビューガイドを郵送した。面接は各事業所の面談室にて約 1 時間の半構造化面接を実施した。内容は①子ども時代、②発症前後のこと、③支援施設に来てからのこと、④将来や人間関係についてである。研究協力者にはこれまでの人生を振り返って自由に語るように依頼した。この他に、研究協力者が自らの人生を語るために持参した闘病記や体験発表の原稿、インタビューのために自宅でまとめた文書や、出版されたブックレットを本人の許可を得て全体像を知るためのデータとした。

3．内容分析

インタビュー内容の逐語録を繰り返し熟読し大筋を捉えた上で、研究協力者の発言ごとに区切りをつけて通し番号を付した。その後、次のジェネラティヴィティとエージェンシーへのコーディングを行った。

第一に、ジェネラティヴィティを成人期の心理社会的危機として捉えて、Stewart ら（1988）のコーディング体系を参考に語られる事象の思い入れ（preoccupation）を 3 つの内容カテゴリーにコーディングした。すなわち、①「他人への配慮」、②「意志行為」、③「必要とされているという意識」である。

①「他人への配慮」は、他人をいっそう良くしようとする配慮、又は当該の配慮に基づいて行われた行為の表現として採り出す。この場合には、他人が希望していることや必要としていることを前提とせず、自分だけの思い入れでよいと捉える。Seneca は『恩恵』を相手の正当な権利や要求を認めて行う義務から区別する。その Seneca の『恩恵』に相当する（小川 , 2006）。次の②「意志行為」は将来に向けた社会的行為への意志表明である。「・・・したい」という希望の表現として採り出す。最後の③「必要とされているという意識」は或る集団や組織に対して接近しようとする際に、あるいはその一員である場合に他人からの求めに気づき、それをどのように受け取るのかといった気持ち（affection）の表現として採り出す。

第二に、McAdams（2001）のコーディング体系を参考にしてエージェンシーを、課題や困難を乗り越える時の行為遂行者のポテンシャル、活力、潜在力、溜めとして捉える。具体的には社会的位置獲得への可能性の表現であり、夢、希望、目標、理想などによって導かれているという気分の表明である。これを「・・・できる」「・・・できた」という表現に着目して採り出す。

内容カテゴリーへのコーディングの実際は、例えば、次の B 氏の発言では、①をジェネラティヴィティの「必要とされているという意識」として、②をエージェンシーの表現として採り出すことができる。

「…（周囲から）「免許取っておきなさいよ」なんて言われて、勉強始めましたら、それもまた、①ちょっとつらかったんですよね。それもあって、体調が、もう最悪になってしまって、とうとう入院ということに…自分に自信がつくんですね、旅に出ると。気分転換にもなりますし、行って帰ってくると、②自分になんかできることがあるような気がしてくる…」

なお、単位とした一発言のなかに、同じカテゴリーの表現が 2 つ入る場合にはダブルカウントとし、同様の文脈で同じ表現が複数の発言に見られる場合には、主要な発言のコーディングデータ番号のみをカウントした。

コーディングの信頼性と妥当性を高めるために、各研究協力者のコーディング結果ごと（4 回）と、研究協力者全員を統合したコーディング結果及び考察（5 回）に対して、合計 9 回の西洋哲学倫理学の専門家によるスーパーヴァイズを受けた。

4．倫理的配慮

研究協力者には、研究協力についてのインフォームドコンセントを行い、同意書に署名を得た上で調査を開始した。本研究は、研究協力者の所属する K 法人への研究計画書の届出（2013 年 9 月 27 日）、J 法人運営委員会（2013 年 9 月 30 日）での承認、研究者が以前所属していた大学の「人を対象とする研究」に関する倫理審査委員会での承認（承認番号 93、2013 年 6 月 3 日）を得ている。また、個人が特定される可能性のある記録内容については、研究結果に影響しない範囲で改変した。

Ⅳ．結果

1．研究協力者と就労に関する背景

研究協力者と就労に関する背景を表 1 に示した。女性 1 名、男性 3 名の 4 名で、年齢は 30 代後半から 50 代前

表1 研究協力者と就労に関する背景

対象	診断名	年齢	性別	入院回数	発症前就労	精神変調及び発症年齢	現在の就労状況	現在の働き方
A氏	うつ病	50代前半	M	4	一般企業	30代半ばに発症、自殺未遂で初回入院	就労継続支援A型事業所	週5日、8時間/日
B氏	統合失調症	40代後半	F	1	一般企業	20代前半に兆候あり、20代後半で初回入院	一般企業（震災特別枠）の非常勤職員	週3日、5時間/日
C氏	統合失調症	30代後半	M	0	アルバイト	高校1年で対人恐怖症、20代後半で診断確定	就労継続支援A型事業所	週4日、6時間/日
D氏	統合失調症	30代後半	M	2	アルバイト	20代前半で神経症、30代後半に初回入院	NPO法人の非常勤職員	週4日、6時間/日

半で平均43歳であった。診断名は統合失調症3名、うつ病が1名であった。入院歴は2回以上が2名、1回が1名、入院歴のない者が1名であった。発症年齢は精神変調を含めると高校1年生から30歳半ばであった。

現在の就労状況は就労継続支援A型事業所での雇用が2名、一般企業の非常勤職員、NPO法人の非常勤職員が各1名であった。働き方は週3回の1日5時間から週5日の1日8時間であった。面接時間は65分から108分であり全員が1回の面接で終了した。1回あたりの平均面接時間は約83分であった。この面接で調子を崩す研究協力者はいなかった。

2. 研究協力者の病歴

A氏

30歳代半ばで婚約破談となり自殺未遂をする。搬送先の病院でうつ病と診断される。退院後は復職するが、一ヶ月程で体調を崩して再入院する。これを3回ほど繰り返す。何か続かない癖がついた感じと言う。友達のすすめで保健所へ行き、そこで精神保健福祉センターを紹介されて1年間通う。センターから就労継続支援A型事業所を希望して就職し10年間働き続けている。眠剤のみの内服で数年前より主治医から一般就労を勧められている。

B氏

大学4年次に内定先での研修と卒論で統合失調症の兆しがあった。再就職と失恋で体調を崩して精神科に入院する。退院後よりデイケアや作業所に通い、当事者会への参加や障害者雇用サポートセンターに登録する。30代後半に母親が難病で要介護となる。この頃より薬の副作用に苦しむが、自ら調べた新薬への変更を主治医に申し出て副作用がなくなる。体調が回復した矢先に被災する。車椅子の母親を抱え人と関わらざるを得ず、社会に一歩踏み出す。現在は障害者就労サポートセンター紹介の革工芸の会社で働いている。

C氏

高校1年生で対人恐怖症となり退学して単位制高校に入学する。一浪後、大学に進学する。幻聴出現により半年遅れで卒業する。この年に精神科を受診する。週末の本屋の店番は3年続いたが、隠しカメラに怖さを感じて辞める。20代後半に希死念慮が出現し統合失調症を発症する。病院デイケアに数年と作業所に1年間通う。人に嫌われているという確信に近い思い込みに悩む。統合失調症発症後、30代前半にはじめて郵便局配達のバイトをする。その後3年間は何もできなかった。父親から働くように言われていたが自分でも働かなくてはいけないと思い、迷った末に就労継続支援A型事業所で働きはじめる。そこで4年間働いている。

D氏

独り暮らしの20代前半にカウンセリングで精神科受診を勧められて神経症と診断される。眠気が強く内服を中断する。国家試験に合格するが、就職できない状態になる。帰郷して主治医と出会い通院がはじまる。20代後半より徐々に活動的になる。30代前半に病名を知りたいと漢方外来で抗精神病薬を外したところ幻覚妄想状態となり精神科に入院する。一度再入院するが、その後はデイケアや地域活動支援センター、就労継続支援B型事業所、NPO法人の障害者枠などの福祉的就労を活用する。現在はNPO法人の非常勤職員、ピアサポーターとして活動している。

3. ジェネラティヴィティとエージェンシーへのコーディング

研究協力者ごとのコーディング結果を表2に示した。この表をもとに、ジェネラティヴィティとエージェンシーの関係性、および研究協力者間での比較検討のために四角形のレーダーチャート（図2）を作成した。これは人の生き方の基本的な様相を視覚的に表現する。コーディング例は、概念および内容カテゴリー、採り出す表現と共に研究協力者ごとに表2で示した全コーディングの約半数以上を抜粋して表3に示した。

コーディングされたデータは全部で87例であった。このうち、次の5例を除いて精神変調又は発症時以後のデータからコーディングされた。ジェネラティヴィティの「意志行為」にコーディングされたD氏51番、55番、56番と、エージェンシーにコーディングされたC氏7番とD氏44番である。

表2　ジェネラティヴィティとエージェンシーのコーディングデータ番号一覧

研究協力者	精神変調又は発症時	ジェネラティヴィティ			エージェンシー
		他人への配慮	意志行為	必要とされているという意識	
A氏	56	240(314)	84, 96, 133, 156, 206, 334	56, 59, 79(80, 84), 87, 98, 151(152), 170(171), 176(180), 249, 348(349, 351)	81, 92(93), 99, 145(144, 187), 154, 176, 189(185, 192, 196, 199), 186, 205, 208, 288, 303, 305
B氏	19	202	47, 47, 51, 117, 143, 213	26, 39, 55, 185, 205	26, 41, 42, 50(49), 194, 202, 206, 210
C氏	30	81	36, 70, 88, 94	34, 35, 40, 48	7, 60, 64, 66, 75, 135, 140
D氏	64	128	51, 55, 56, 128	64, 65, 67, 68, 79, 116, 119	44, 83, 85, 86, 99, 111(115), 119, 130, 134

ジェネラティヴィティの「他人への配慮」へのコーディングは各研究協力者 1 例ずつと少なく、エージェンシーへのコーディングが多かった。ジェネラティヴィティの「必要とされているという意識」とエージェンシーには正比例の関係がみられるが、これら 2 つと「他人への配慮」と「意志行為」は独立した関係にあった。「意志行為」は A 氏と B 氏が 6 つ、C 氏と D 氏は 4 つであった。

レーダーチャートは「他人への配慮」で鈍角となり、残りの「意志行為」、「必要とされているという意識」とエージェンシーで鋭角を形成するという全員が類似した形状を示した。研究協力者間では A 氏がジェネラティヴィティの「他人への配慮」を除く 3 カテゴリーで最も多くコーディングされた。

コーディング内容は、最も少なかったジェネラティヴィティの「他人への配慮」では「やっぱり同じ病気で苦しんでいる人が居れば…」（A 氏 , 240）や「つらいときどうしたらいいのっていう人」（D 氏 , 128）といった同じ苦しみを抱えた他人への配慮として表現されていた。病気や障害のない次世代に対する思い入れや、それに基づく行為についての表現はみられなかった。

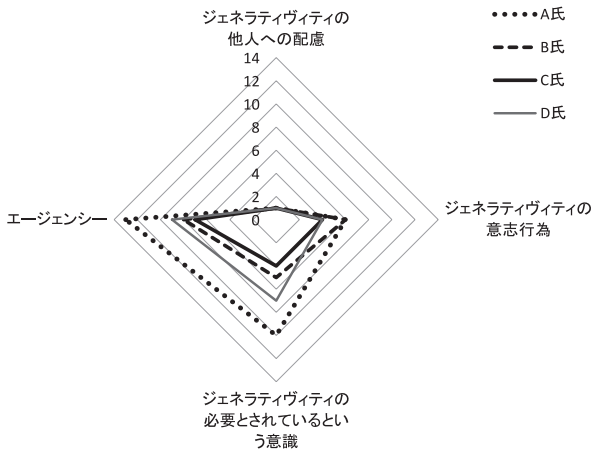

図２　ジェネラティヴィティとエージェンシーの関連性

最も多くコーディングされたエージェンシーのコーディング内容には次の 2 つの特徴のあることが分かった。一つは、「働く目標」（A 氏 , 208）、「技術の習得」（B 氏 , 202）、「少しずつ仕事をやって、ちょっと回復させよう」（D 氏 , 85）と考えること、薬の効果を実感すること（D 氏 , 111）などであり、仕事をして自立するという未来の表現である。

もう一つは友達という表現の多いことである。例えば、発症後に得た同じ病いを抱える友達との関係のよさ（A 氏 , 303）を実感すること、「友達の力」（C 氏 , 66）を得ることが自分を受け入れる「原動力になった」（C 氏 , 66）と語ることなどである。

Ⅴ．考察

1．発症という分岐点を越えるもの

人の生き方の基本的な様相をテーマとするライフヒストリーの内容分析では多くのデータが精神変調又は発症時以後のデータからコーディングされた。このことは、精神変調又は発症時を一つの分岐点として着目する必要性のあることを示唆している。つまり、発症の兆しや発症後の語りは、それのなかった時代の語りと同様に扱うことができないということを意味する。

例えば、次の D 氏の小学校時代の語り「･･･ 学校に行くと、集団生活に入ると、緊張とかあるんでしょうね」（D 氏 , 10）は、ジェネラティヴィティの「必要とされているという意識」にコーディングすることができない。その理由は２つある。１つは、子ども時代であること、もう一つは発症前の感情だからである。

しかし、大学受験の D 氏の語り（D 氏 , 51, 55, 56）は、

表３　ジェネラティヴィティとエージェンシーのコーディング例

概念	カテゴリー	採り出す表現	コーディング例	研究協力者	データ番号
ジェネラティヴィティ	他人への配慮（Cairng）	他人をいっそう良い状態にもたらそうとする配慮、または、それにより行われた行為の表現。	やっぱり少しでも同じ病気で苦しんでる人が居れば、私の経験が役立てばいいなっていうことで･･･	A氏	240
			･･･、それで1人でも元気な人が増えてくれたらいいな、と思っていますね	B氏	202
			ちょっとでも楽になってほしいなっていう気持ちがあるんで、	C氏	81
			･･･つらいときとかどうしたらいいのっていう人･･･をなんか癒やせないかなっていう、･･･	D氏	128
	意志行為（Intentional action）	未来への意欲、将来に向けた社会的行為への意志表明の表現。「…したい」という希望の表現。	行ってみよう、試してみよう･･･、焦らずやってみようっていうことから、取りあえず行ってみよう･･･	A氏	133
			･･･やりたいって言えば･･･自分からこういう出版をやりたいって言えば、やらせてくれる･･･	A氏	156
			･･･やれること、今やれることをやれたらなっていうふうには思ってるので	A氏	206
			･･･何かしなくちゃなって、ちょっと気持ちを奮い立たせなくてはいけない･･･服用したいというふうに、併薬したいというふうに希望･･･	B氏	47・47
			･･･私は回復したいと思っていて、･･･	B氏	143
			･･･もう一度そこ（単位制高校）でやり直してみようかなって･･･	C氏	36
			･･･（今の仕事を）長く続けたいなと思ってる･･･	C氏	70
			･･･やっぱり自分の行きたい医療のほうの専門学校に行きました	D氏	56
			･･･できれば患者さんを治療したいんですけど･･･	D氏	128
	必要とされているという意識（Need to be needed）	或る集団、組織に対して接近しようとする際に、あるいは、その一員である場合に、他人からの求めに気づき、それをどのように受け取るのかといった、気持ちの表現。	そこからちょっと私のほうが目標を持ってやってたもので、その自分の人生設計が崩れてしまったっていうことがあって、ちょっと変調を来してきたわけです。	A氏	56
			･･･全然雰囲気が同じ病院でも違ってて、すごくなんか楽しくて、入院したんですけど･･･	A氏	79
			･･･働いてるなっていうような感じがしたので。	A氏	151
			･･･ここ（事業所）に来たとき、・・・すごいとこだなと思って、こういう所があるんだと思って･･･	A氏	170
			･･･不安はありますけどね。環境とか社会については	A氏	348
			･･･周囲が勧めたもんですから、･･･ちょっとつらかったんですよね。	B氏	26
			明日になると、職場に自分の障害が全部ばれているんじゃないかっていう心配が、プレッシャーっていうのがあった	B氏	55
			病院では、･･･作業療法っていうのは、本当に気分転換になりましたね。･･･結構楽しくできた	B氏	205
			･･･誰かに会うんじゃないかとかっていう怖さとか･･･	C氏	35
			（転校した高校で）･･･人からの視線っていうか、圧力にはまだ耐えられたんじゃないかな	C氏	40
			･･･なんかありのままの自分が出せない感じで、･･･いまいちピンとこないな、しっくりこないなっていう感じ	D氏	64
			･･･徐々にありのままの自分を出せるような感じに、･･･そっから本当に自分がなくなっていく感覚を止められず･･･	D氏	68
			外行っても、なんか面白くないんですよね。感情があんまり、鈍くなったせいか、なんか面白くない、･･･なんか生き生きしない	D氏	79
			（･･･ファームで）自然からいろいろパワーもらえたのもあって、また回復してきて、･･･	D氏	116
エージェンシー	行為遂行者のポテンシャル、活力、潜在力、溜め	社会的位置獲得への可能性の表現。夢、希望、目標、理想などによって導かれているという気分の表明。「…できる」「…できた」という表現。	･･･就労するためのいろんな軽作業とか体力作りとか、病気の勉強とか、そんなようなことをやる･･･	A氏	99
			眠剤だけなので、･･･先生もそんなに頼らなくても。･･･	A氏	145
			･･･ここで働いてた人もすごくリーダーシップ･･･尊敬できるメンバーが居て、･･･	A氏	154
			仲間とかできたりとか同僚とかできたことによって、だんだんと･･･なんか良くなってった	A氏	186
			もう大丈夫だから、しろ、しろって言うんですけど、多少やりがいがあるのでって、そういうことを言ってますけどね。もう主治医も治ってると思ってます。緩解したと思ってますけどね。	A氏	189
			･･･目標として、働く目標があったので、	A氏	208
			人間関係はいいと、友達の関係はいいと思います。･･･	A氏	303
			（呼称が統合失調症に変わって）･･･人に言うことができるんじゃないかと思うようになりまして、･･･	B氏	41
			･･･自分でも、もうやれるんじゃないかな、っていうか、やらなくちゃいけないな、っていうふうに思うようになりまして･･･	B氏	50
			･･･（皮細工）技術の習得を、しっかりとやった上で、･･･	B氏	202
			物を作るのが、もともと好きだった･･･	B氏	206
			全校生徒の前での発表ですとか･･･当時（小学校の頃）は割とサラッとできたような気がします	C氏	7
			･･･信頼できる人間関係っていうのか、素直に自分を出せる友達、受け入れてもらえる友達っていうのができてきて、だんだんなんか、自分はごく普通の人だったのかなって･･･	C氏	60
			･･･で働けたことと、・・・の友達、・・・だけじゃないですけど、その作業所の友達であったりとか、そういう友達の力っていうのも大きいと思います（自分を受け入れられるようになる原動力になって）	C氏	66
			･･･昔に比べればだいぶ自己主張もできるようになってきましたし、思ったことは何となく言えるようになってきた。人との信頼関係のある友達ができたりとか、仕事も少しは任せてもらえるようになったり･･･	C氏	75
			得意な科目にはなったんですけど、逆に、	D氏	44
			･･･短い時間のパートの仕事始めまして、で、少しずつ仕事をやって、ちょっと回復させようと思って、･･･	D氏	85
			･･･（薬が変わり増えたら）今度は活力とか意欲が出てきたんです	D氏	111
			･･･やってみたら結構できて	D氏	119
			･･･さらにその人とコミュニケーションできたら、･･･強みを生かして何かできないかな	D氏	130
			･･･もっとできることがあるんじゃないかな･･･	D氏	134

発症前になるが、ジェネラティヴィティの「意志行為」にコーディングすることができる。その理由として、一つは、青年期から大人への移行期にあたること、もう一つは「意志行為」が未来への行為を含むことが挙げられる。

また、発症前の子ども時代を語った C 氏の表現はエージェンシーにコーディングできる。それは、子ども時代のポテンシャル（C 氏 , 7）が未来に向けての過去の財産となり、発症という分岐点を越えて発症後のポテンシャル（C 氏 , 75）につながっているからである。

つまり、ジェネラティヴィティのうちの「意志行為」とエージェンシーは、行為遂行者の持ちものであり未来に向かって開かれているために、発症前後という分岐点を越えることができる。北村（2004）の指摘する「病いの中に意味が創り出されていく過程が病いを得た時から始まる一方で､病いを得る以前の人生から影響を受ける」というのは、行為遂行者が発症前から持っていたものを使うという意味である。

したがって、行為遂行者は「発症という分岐点を越える」ことのできる持ちものを発症に先立って備えているために発症時からの回復が可能になると考えることができる。このように考えると、精神障害者の回復で課題となるのは回復した人が決して諦めなかった（Ahern & Fisher, 1999）ことから明らかなように行為遂行者が未来への希望をもつことである。

2. 回復者の語り

研究協力者全員が発症時より回復への希望を失わずに生きてきた。彼らは現在も心身の状態をコントロールしながら働き続けている。つまり、4 人の研究協力者は行為遂行者の持ちものを使って現在の状態まで回復した人たちである。

なかでも、発症前に一般企業での就労経験のある A 氏は、退院後よりデイケアなどの地域支援を受けながら働く意欲をもち続け、就労継続支援 A 型事業所にて 10 年間、悪化することなく就労を続けている。現在の週 5 日、一日 8 時間という働き方や内服状況、主治医の勧めからも、最も回復した人である。レーダーチャートではジェネラティヴィティの「他人への配慮」を除く 3 カテゴリーで最も多くコーディングされた。うつ病と統合失調症の違いはあるが、4 人のうち A 氏をリカバリーへの道（Ragins, 2002）の先を行く人とみることができる。

回復という言葉には回復過程にあるという概念が含まれるため､精神疾患や精神障害があっても回復者である。回復（リカバリー）は人々が完全な健康に戻るとか､失ったものすべてを取り戻すということではなく、それらがあってもなくてもよく生きることができるということを意味する（MHC,1998）。したがって、回復者であってもつねに精神疾患や精神障害のある自分と折り合いをつけながらよく生きる努力が求められる。

3. 回復者の語りにみられる発達課題の特徴

人の生き方の基本的な様相を視覚的に表現する四角形のレーダーチャートは「他人への配慮」が極端に少なくエージェンシーやジェネラティヴィティの「必要とされているという意識」が多いという歪な形をしている。さらに研究協力者全員が類似した形をしていることから回復者の語りにみられる発達課題の特徴は次の 2 つである。一つは、ジェネラティヴィティの「他人への配慮」の表現が極端に少ないことである。その内容は、同じ病気で苦しむ仲間への配慮として表現されていた。もう一つは、エージェンシーの表現が多いことである。内容には、未来に向けられたベクトルは社会復帰に向かっているということや友達という表現が多くみられた。友達との出会いは人生のターニングポイント（田中 , 2000a）になる。この場合の友達とは同じ苦しみをもつ仲間（ピア）のことである。

このような回復者の語りにみられる発達課題は病気や障害と折り合いをつけて生きてきた人のパーソナリティ特性とも考えられる。

4. 能動性を発動させる準備が整うということ

これらの発達課題の特徴を抱える精神障害者への支援を見出すために､再び行為遂行者である｢私｣と他人､｢私｣と未来についてのイメージ図（図 1）に戻る。

第一に、①「他人への配慮」よりも③「必要とされているという意識」に多くコーディングされたことから、他人をよくすることへと関心を向けることはできないが、他人からの求めを受け取る構えは整っていることがわかった。

第二に、未来との関係において、②「意志行為」よりも④エージェンシーに多くコーディングされたことから、能動性の結果としての受け取りの多さが示された。このことは、伊東（2016）が指摘するようなリカバリーの実現に活用できる資源を探すという二者択一性、肯定的意味づけではなく、ポテンシャルとして未来に開かれているという意味でストレングスモデル（Rapp & Goscha, 2012）やストレングスアセスメント（栄 , 2014）を理論的に支える。ポテンシャルとして未来に開かれているというのは、例えば、手を持っているから手仕事ができると考えることである。

上記 2 つのことから、回復者の語りには他人と未来との関係において能動性を発動させる準備の整った状態が見出せる。

5. 精神障害者への支援の在り方

以上の考察から、次の 3 点を精神障害者への支援の在り方として提示する。第一に、支援者は、人間は常に自分の可能性を追求する存在であり、必ず回復に向かって動き出す可能性を秘めている、そう見なすことの重要

性を理解することである。Heidegger（1927）の被投的な投企（Entwurf）の概念はその重要性を指摘している。支援者が先に諦めること、投げ出すことをしてはいけない。これの根拠は次の 2 点である。一つは、ジェネラティヴィティの「意志行為」とエージェンシーが行為遂行者の持ちものであり、未来に向かって開かれているために、発症に左右されないということである。もう一つは、他人および未来との関係から行為遂行者は能動性を発動させる準備の整った状態にあるということである。

第二に、社会復帰を目指し他人との関係性のなかで、本人のできるという実感を増やす支援をする。例えば、セルフケアは他人との関係をとおして社会とのつながりを目指すなかで獲得されるべきである。これの根拠は次の 2 点である。一つは、エージェンシーが発症後に多く表現され、その内容は未来、社会復帰に向かっているということである。もう一つは、友達という表現の多くみられるということである。

第三に、仲間との信頼関係を築く支援をする。他人への配慮は、最初に同じ病いを抱える者への配慮となって表現されたことから、それが精神障害者にとって無理のないプロセスであると考えられる。精神障害者の他人との関係性の取り方には、回復過程の生活拡大の在り方にパターンがある（中井 , 1998）ように何らかの規則性があるのかもしれない。

6. 本論文の限界と今後の課題

本論文の限界と今後の課題は次の 4 点である。一つは、人の生き方の基本的な様相の理論的根拠を Erikson とアメリカ人哲学者 Bakan（1966）の思考から得たことである。Erikson はジェネラティヴィティをルターやガンジー、フロイトなどのいくつかの世紀にわたり、またいくつかの大陸にまたがる人々の伝記から抽出している（Levinson, 1978）。島国という地理的文化的要素によって人の理想とする生き方が異なるとすれば、日本人のモデルは誰になるのだろうか。また、エージェンシーについても、アメリカ人のパーソナリティ研究が土台とされていることから日本人のパーソナリティに合致しない可能性がある。文化的な異なりがパーソナリティのどこまでに及ぶと考えるのか。これらの課題については、今後も探求を続け、内容カテゴリーの精錬に生かす。

第二に、対象者が 4 人と少ないこと、働いている精神障害者であるということ、男性が 3 名で女性が 1 名であること、診断名が統合失調症 3 名、うつ病 1 名であることなどの課題が残る。今後は、一般人も含めて対象者を増やし多様な対象のライフヒストリーの比較検討を行うことで、より適切な支援方法を明らかにすることができよう。

第三に、内容分析におけるコーディングの信頼性が十分に確保できなかったことである。本研究の長期的展望には、独立した二名のコーダーによる語彙集を使ったコーディングと、一致率算出が可能な方法論の確立が含まれている。それに対して今回は、専門家によるスーパーヴァイズを繰り返し受けることで信頼性の確保に努めた。今後は、データマイニングや語彙分析も視野に入れて語彙集の作成を行う。なお、妥当性についてはスーパーヴァイズにより担保されたと考える。

第四に、他人への配慮に関心がもてない理由とこの発達課題を克服するための支援方法についての解明が残る。

Ⅵ. 結論

働く精神障害者の発達課題の特徴は、①「他人への配慮」が少なく、同じ苦しみを抱えた仲間への配慮として表現されていた。一方、②「行為遂行者のポテンシャル」は多くみられ、内容は社会復帰を目指すこと、仲間を得ることの表現が目立った。このような特徴から、次の 3 点を支援の在り方として提示する。①精神障害者を常に自分の可能性を追求する存在と見なすこと、②社会復帰を目指し他人との関係性のなかで「できる」という実感や、③仲間との信頼関係が築けるような関わりを増やすことである。今後の課題としては、①他人への配慮に関心がもてない理由と、この発達課題を克服するための支援方法についての解明、方法論的には、②対象者数を増やすことや、回復の様々な段階にある人、同年代の病気や障害のない人など選定基準を変えて比較検討すること、③内容カテゴリーの精錬と語彙集作成が明らかとなった。

謝辞

本研究にご協力いただきました研究協力者の皆様、ならびに職員の皆様に心より感謝申し上げます。また、最後までご指導をいただきました東洋大学名誉教授の村上勝三先生に心より感謝申し上げます。

本論文は、第 24 回日本精神保健看護学会にて発表した内容に加筆・修正を加えた。

引用文献

Ahern, L. & Fisher, D.B.（1999/2004）. 齋藤明子 , 村上満子（訳）. 自分らしく街でくらす : 当事者（わたしたち）のやり方（p7）. RAC 研究会 .

Anscombe, G.E.M.（1963/1984）. 菅豊彦（訳）. インテンション（p6）. 産業図書 .

Bakan, D.（1966）. The duality of human existence: Isolation and communion in Western man. Beacon Press.

Benner, P. & Wrubel, J.（1989/1999）. 難波卓志（訳）. 現象学的人間論と看護 . 医学書院 .

独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構障害者職業総合センター（編）.（2012）. 概要 . 資料シリーズ No.71 医療機関における精神障害者の就労支援の

実態についての調査研究（pp5-6）．独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構障害者職業総合センター .

Erikson, E. H.（1959/2013）．西平直 , 中島由恵（訳）．アイデンティティとライフサイクル 初版 . 誠信書房 .

江頭説子 .（2009）．社会学とオーラル・ヒストリー . 法政大学大原社会問題研究所（編）．人文社会学研究とオーラル・ヒストリー（pp69-103）．お茶の水書房 .

Heidegger, M.（1927/2013）．熊野純彦（訳）, 存在と時間（三）（pp176-208）．岩波文庫 .

星野文男 .（1998）．それぞれが能力を出し合えるような職場に . やどかりブックレット編集委員会（編）．精神障害者にとって働くこととは（pp13-33）．やどかり出版 .

伊東香純 .（2016）．ストレングスモデルにおけるリカバリー概念の批判的検討 . Core Ethics, 12, 1-11.

菅豊彦 .（2016）．アリストテレス「ニコマコス倫理学」を読む : 幸福とは何か . 勁草書房 .

北村育子 .（2004）．病いの中に意味が創り出されていく過程 - 精神障害・当事者の語りを通して，構成要素とその構造を明らかにする . 日本精神保健看護学会誌 , 13（1）, 34-44.

Kleinman, A.（1988/1996）．江口重幸 , 五木田紳 , 上野豪志（訳）．病いの語り - 慢性の病いをめぐる臨床人類学 . 誠信書房 .

黒田亘 .（1992）．行為と規範（p56）．勁草書房 .

Levinson, D. J.（1978/1992）．南博（訳）．ライフサイクルの心理学（下）（pp236-237）．講談社学術文庫 .

Maruna, S.（2001/2011）．津富宏 , 河野荘子（監訳）．犯罪からの離脱と「人生のやり直し」元犯罪者のナラティヴから学ぶ（pp74-75）．明石書店 .

McAdams, D.P.（2001）．Cording Autobiographical Episodes for Themes of Agency and Communion. Unpublished manuscript, Northwestern University, Evanston, IL. Retrieved from: https://www.sesp.northwestern.edu/docs/Agency_Communion01.pdf（2014 年 6 月 18 日現在）.

Mental Health Commission.（1998）．Blueprint for Mental Health Services in New Zealand: How Things Need to Be（p1）．Mental Health Commission.

中井久夫 .（1998）．最終講義 分裂病私見（pp96-97）．みすず書房 .

野口智子 .（2013）．周りの人に支えられ働き続ける．やどかりブックレット編集委員会（編）．私が選んだ働き方ー企業就労した人たちの経験（pp31-39）．やどかり出版 .

小川正廣 .（2006）．解説 . Seneca. 小川正廣（訳）．セネカ哲学全集 2 倫理論集Ⅱ「リーベラーリスに寄せる恩恵について」（pp511-524）．岩波書店 .

大橋千恵子．（2006）．働くことは安心・充実 一般事業所．やどかりブックレット編集委員会（編）．精神障害者が働き続けるには（pp13-40）．やどかり出版 .

Plato.（1578/1974）．藤沢令夫（訳）．プラトン全集 9（pp298-299）．岩波書店 .

Ragins, M.（2002/2005）．前田ケイ（監訳）．ビレッジから学ぶ リカバリーへの道 精神の病から立ち直ることを支援する . 金剛出版 .

Rapp, C.A. & Goscha,R.J.（2012/2014）．田中英樹（監訳）．ストレングスモデル リカバリー志向の精神保健福祉サービス（第 3 版）．金剛出版 .

栄セツコ .（2014）．病いの経験に意味を見出すストレングスモデル . 精神科 , 25（6）, 614-617.

桜井厚 .（2014）．現在社会学ライブラリー 7 ライフストーリー論（p6）．弘文堂 .

Stewart, A.J., Franz, C., & Layton, L.（1988）．The Changing Self: Using Personal Documents to Study Lives. Journal of Personality, 56:1, 41-74.

田中美恵子 .（2000a）．ある精神障害・当事者にとっての病いの意味 - S さんのライフヒストリーとその解釈 : スティグマからの自己奪還と語り - . 聖路加看護学会誌 , 14（1）, 1-20.

田中美恵子 .（2000b）．ある精神障害・当事者にとっての病いの意味 - 地域生活を送る N さんのライフヒストリーとその解釈 - . 看護研究 , 33（1）, 37-59.

Generativity and agency of working people with mental disabilities: Life histories of four persons

Mitsuko Murakami

Abstract

Background: The conclusion of the Convention on the Rights of Persons with Disabilities promotes employment and independence of people with mental disabilities. Support is required to help them meet their challenges for working and becoming independent.

Objective: We clarify the characteristics of developmental issues based on the life histories of working people with mental disabilities and also present approaches to providing support, and then eyglicate methodological issues.

Methods: We conducted a semi-structured interview with four persons with mental disabilities who used job support at two corporations in the Kanto region. We used content analysis that deductively coded the interview data to the themes of the basic aspects of the ways that these individuals lived their lives: generativity (interest in others) and agency (potential of people who act).

Results: Agency expressions were most frequently found. Of three categories of generativity, each person gave one expression designated as “Caring”.

Conclusions: The characteristics of the developmental issues of working people with mental disabilities were (1) “Caring”, which was expressed as consideration for their peers with the same difficulties, while in contrast (2) agency expressions frequently appeared after the onset of diseases and the expressions about rehabilitation and their peers were noted. Based on these characteristics, we present the following three points as approaches to providing support: (1) we should always regard people with mental disabilities as those who pursue their own potential, (2) we should help them increase their opportunities for feeling “capable” in rehabilitation and in their relationships with others, and (3) we should help them promote connections in which they can establish reliable relationships with their peers. Methodologically, refining the content category and creating lexicons were identified as tasks.

Key words: working, people with mental disabilities, Generativity, Agency, life history

Okinawa Prefectural College of Nursing